

二つの「続白山紀行」

「続白山紀行」は、高田保浄(1787-1847)が中根雪江に誘われて1833年(天保4)7月に白山に登った際の見聞がもとになっています。加賀成教の「白山全上記」を補注するために書かれたものでありながら、紀行というよりは多くの先行文献を引用した地誌に近いものになっています。

高田保浄は、「越前国名蹟考」の著者である井上翼章の次男で学問を好み、中根雪江や加賀成教とも親交が深かったとされます。「国絵図」「帰雁記」「名勝志」「城跡考」「白山紀行」などの旧記の引用は「越前国名蹟考」と重なるところが多く、「大人かつていふ(嘗て云)」として井上の考察が各所で引用され、同様に「成教いふ」として「白山全上記」もたびたび引用されています。また、これに対して時には「保浄いふ」として自説を述べたり、あるいは反論したりしています。全体として旧記を丁寧に追いながらも、自身の見聞で検証

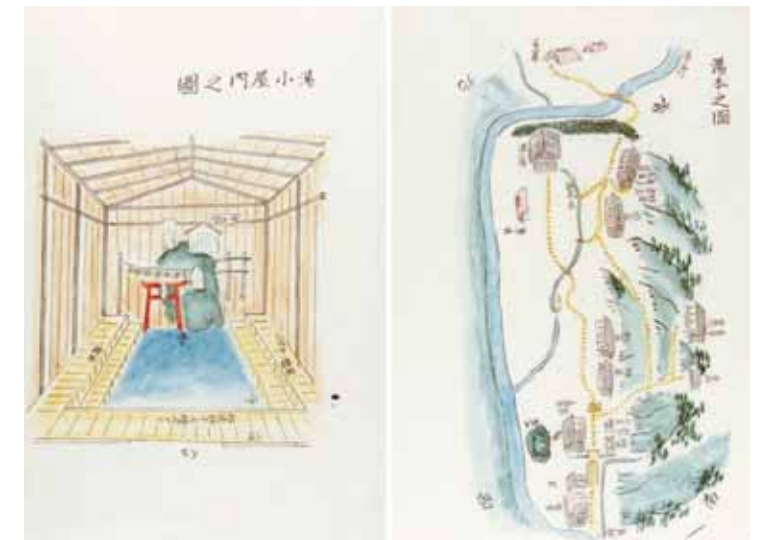
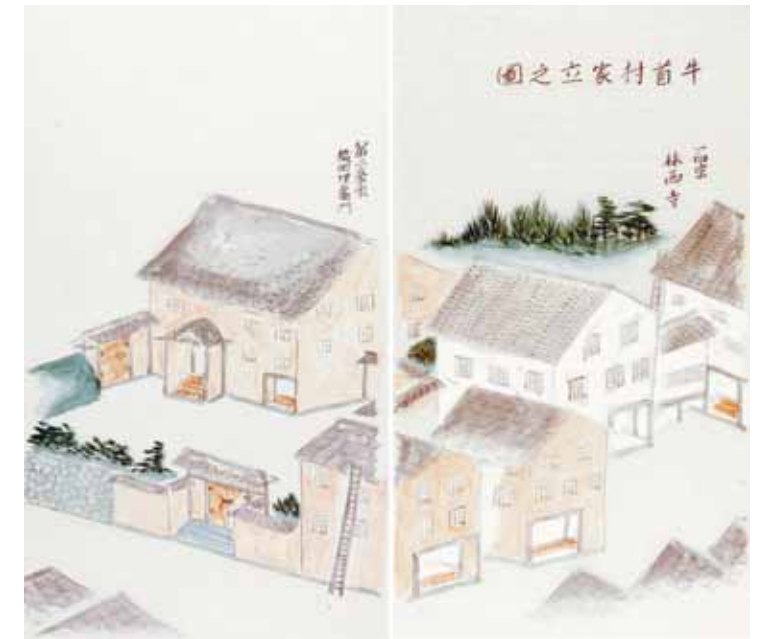
できないことには容易に納得せず、「附会の説決して信すへからず」という実証主義が貫かれているといえましょう。

ここで取り上げる二つの「続白山紀行」は、いずれも手書きの「写本」です。国文学研究資料館のものは、松平春嶽に関する資料編さんの一環として1922年(大正11)に福井市内の高田家に伝存していたものを影写しています。山内家のものは、劔神社禰宜であった上坂津右衛門が1941年(昭和16)に筆写したのですが、残念ながらもともとなった本はわかりません。二つの写本には内容には大きな違いはありませんが、かな遣いや表記に違いが多くみられることから、少なくとも別の本から写されたことが推測できます。

白山参詣とその紀行の広がりを見ると、県内にはここで紹介した以外の未発見の写本や白山紀行がまだまだ残されているかもしれません。



■ 高田保浄「続白山紀行」 1833年(天保4)
国文学研究資料館所蔵



■ 高田保浄「続白山紀行」 1833年(天保4)
山内秋郎家文書 福井県文書館所蔵

